



キンゼイコレクション

現代根付

- 手の中の森羅万象 世界の匠たち -
賛助出品：高円宮コレクション

千葉市美術館所蔵

浮世絵名品展



小さな根付に大きな人の輪 キンゼイコレクション現代根付展

今年の初夏は、少なくとも千葉をはじめ関東地方では、雨が少なく、典型的な空梅雨で終わりました。梅雨明け宣言が出る少し前から、早くもじりじりとした日射しが照りつけ、行ったこともないのでしょうに「アフリカ並みの猛暑だね」などという声を、バスを待つ行列に並んで耳にはさんだほどでした。

「アフリカ」と聞いて、すぐに象牙のことに連想がおよび、美術館の学芸員の苦勞が思い出されました。実はこの夏、米国のキンゼイ・コレクションを拝借し、「現代根付展」を開催する予定なのですが、かのワシントン条約の規制にひっかかって、象牙細工の一部の作品が借りられなくなりそうだったからです。

ワシントン条約といっても、すぐにはお分かりでないかも知れませんが、年配の方の中には、第一次世界大戦後の国際会議や、その折に締結されたワシントン海軍軍縮会議にかかわる条約と早のみこみされる方もいらっしゃるかも知れません。しかしここでいうワシントン条約とは、そうした刻^{けい}呑^{のん}な内容の条約ではありません。正式名称は、「絶滅のおそれのある野生動植物の国際取引に関する条約」という長たらしいものです。要は、一部の野生動植物の乱獲を防ぐために、国際間の商取引を禁止、または規制しようという条約なのです。1973年にワシントンで採択され、わが国も1980年に加入して今日に至っています。

象牙は、掛け軸の軸とか、三味線の撥^{ぼち}、根付などの小工芸品から丸彫りの象牙彫刻、あるいは象牙1本をまるまる床の間の飾り物にするなど、日本人にはかねてからお馴染みの、そして好み的高级素材でした。それだけに諸外国の監視の目も厳しく、日本のお役所も自粛・自制を強めがちな品目なのです。ところが、キンゼイ・コレクションの中には、当然のように象牙製根付の名作が数多く含まれており、それらの一部がアメリカからの出国、日本への入国が、両国のお役所の許可を得られず、四苦八苦することとなったのです。象牙の輸出入が全面的に禁止されるようになったのは1989年のことで、それ以前に正規の手続きを経て購入した作品に関しては問題はないと思われるわけで、私たちが選んだ象牙製の作品も、キンゼイ氏がその点を留意して推薦してくれたものばかりなのですが、それでも問題はなかなかすっきりと解決できないのです。

正直に言いますと、この文章を書いている現在も打開策を模索しているところなのですが、ここに至るまでに、多くの方々の予想外の善意が寄せられ、特別展を企画した私たちを感激させてくれたのでした。そのことをここに、二、三、紹介させていただきます。

まず、5000点以上もの所蔵品の中からその珠玉の名品を必要だけ無償でお貸し下さったロバート・キンゼイ氏は、さらに、作品の出入国に関する面倒な手続きにも全面的な協力の手をさしお越してくださりました。また、同じカリフォルニアに住み、日本美術をこよなく愛するジョウ・プライス夫妻は、この企画のきっかけを作ってくださった関係もあって、終始担当の学芸員を励ましてくれたばかりでなく、根付の魅力を紹介するCD-ROMを新たに制作していただき、万一象牙作品が届かなくなった場合にはそれを館内でみられるように配慮してくださいました。

そしてさらには、現代根付の芸術性を愛し、その制作にたずさわっている方々を励ましてこられた高円宮殿下が、妃殿下とともに日頃から愛玩されておられるご所蔵品の数々を、特別に友情出品してくださいました。殿下は多くのコレクションの中から、キンゼイ・コレクションにはない1989年以降の制作になる象牙の作品も選んでくださいました。

そのほか、ここにはお名前をあげられない多数の方々が、世界でも初めての本格的な「現代根付(コンテンポラリー・ネツケ)」展の実現のために協力をしてくださいました。小さな小さな、手のひらの上でいつくしむ、楽しくもかわい根付のために、国境を越えて多くの方の善意が寄せられてきたことを、うれしく、ありがたく感謝されます。個々の根付作品の美しさやおもしろさに加え、そうしたご好意の余薫がただよって、展覧会場をあたたかく、やさしい雰囲気につつんでくれることでしょう。

この夏は暑気払いに涼しい美術館を訪れて、賢^{さとし}なひとときを過ごされてはいかがでしょう。小・中学生は、8月中の夏休みに限り、入場無料になりました。ご家族お揃いでのご来館を、館員一同心からお待ちしております。

館長 小林 忠



スーザン・レイト《北風と太陽》琥珀・貝・黄楊 1999年 高円宮コレクション

「キンゼイコレクション 現代根付」展について



根付とは？
根付のたどった歴史

ポケットのない着物の時代、印籠、巾着袋、煙草入れなどの持ち物は、帯に吊り下げて携帯しました。根付（ねつけ）とは、それら提げ物の紐の先端に取り付けて、帯から滑り落ちないようにするために用いられていた、小さな彫刻（細工物）です。いわば、江戸時代版携帯ストラップのマスコット、といったところでしょうか。携帯電話のストラップは、

実用的には紐だけでもいいのに、多くの人が何らかの飾りをつけて気分によって付け替えたりして楽しんでおられることでしょう。自分の楽しみはもちろん、ちょっと人にも見せたいという気持ちでマスコットを選んだりされるのではないのでしょうか。根付もこれに近いところがあります。印籠や煙草入れは特に男性の装いには欠かせないアクセサリであり実用もできるもの、これで後ろ姿を決めたものでした。提げ物とのデザイン上の組み合わせを工夫したり、自分の干支の動物の根付を使ってみたり、誰もが一つや二つは愛用の根付を持っていて、手の中でいつも撫でたり転がしたりしていたのです。

実用的には何か丸みのあるものであれば根付の用は足せませす。実際、木の破片や、胡桃などの木の实、動物の歯など、そのまま根付として用いてもいたようです。それがだんだん凝った細工や彫刻を施すようになり、江戸時代中期には根付を専門に作る職人も生まれ、そして江戸時代後期に至って、その流行の頂点を極めました。一つや二つ使うために持っているのでは飽きたらず、様々な贅沢な素材を使ったり、訳ありのデザインのものを作らせたり、高貴の人々は職人をお抱えにしてまで、根付をコレクションしたりするようにもなりました。こうして、日本の細密工芸美術の粋ともいえるほど、驚くべき技巧がこらされた、また洒落なデザインに富んだ小さな世界が作られていきました。

しかし、明治維新後、洋装になって実用上の需要が減り、同時に海外の人々の目に留まった根付は、浮世絵と同様、あるいはそれ以上に海外に「大流出」することになりました。欧米の美術館・博物館を訪ねると、日本ではほとんど見たことのない根付を大量に目にする事になり、根付がいかにたくさん海を渡ったのかという事実にあらためて圧倒されます。そんな時代でも実は日本でも一部で愛好は続き、現在でも人気の上位を争うほどの名工たちがそれに応えて、名作も生まれてはいたのですが、はじめは江戸時代彫刻の代表であるかのように持ち上げ

られていた根付も、次第に様々な要因から「美術」の範疇から外れることとなり、日本国内での認知度は徐々に下がってきてしまいました。

当館のお客様には浮世絵のファンも多いと思いますので、それほどでもないかも知れませんが、現在、「根付」という言葉自体知らない方が多いことでしょう。たとえば、美術史や江戸時代美術史の本をひもといたところで、根付について触れている例はきわめて少ないのです。この点、同じく海外に流出した浮世絵と完全に運命が分かれてしまったといえます。浮世絵の里帰り展は珍しくなくなりましたが、根付についてはほとんどなく、実は今年の年頭に当館で浮世絵展を行ったスイスのパウアーコレクションは、根付のコレクションでも世界的に有名なのですが、中国陶磁、浮世絵、根付というコレクションの三本柱のうち、根付展のみは日本で実現していません。そして、根付のことをご存知の方でも、それは江戸時代の遺物である、という認識が強いと思われ、

根付の制作が連続と受け継がれてきたこと、さらに新鮮な感覚を盛り込んだ「現代根付（コンテンポラリー・ネツケ）」と呼ばれる作品群も出てきたことについては、残念ながらこれまであまり知られていなかったのではないのでしょうか。



若林寛水《蛙》マホガニー
1991年 高円宮コレクション

大村桂雲《猿》象牙 1973年



「現代根付」

現代の根付は、用いられる素材、テーマとも格段にパラエティ豊かなものとなっており、作家も世界に広がっています。

欧米では長年熱心に根付が愛好・研究され、美術館・博物館などでのコレクション展示、さ

らに特別展もしばしば開かれ、根付に関する出版物も日本の比ではない数のものが一般に入手できますので、それらから根付に接し、自分で根付を制作する人も出てきており、プロも少なからずいるのです。日本の作家には思いもよらなかった、意表を突くアイデアに満ちた作品がこの世界に活気をもたらしました。互いに刺激を受け合って、現代ならではの面白く凝った作品も増えています。

日本でも最近では伝統と無関係の若手の作家も出てきており、新鮮な目で伝統を見つめ直した作品を創作しています。

また、工芸の別のジャンルの専門家、例えばジュエリーなど金工家、漆工芸、ガラスの彫刻家、陶芸家といった人たちが根付も手がけることも増えており、今回の展示でもそれらの多くを見ることができます。もともと江戸時代でも、刀装具などを手がける金工師、印籠とセットで根付も作った蒔絵師など、様々な職人が根付も制作していましたから、規模は違うとはいえ、この活況に近くなってきたといえるかもしれません。

現代でももちろん根付を使っている人たちはいますが、やはり本展に展示されているような作品は、鑑賞用として制作し、求められるという面が強くなっています。この観点からは、「現代において「根付」とは何か」、という問いが当然出てくるでしょう。根付とは、実用上、①小さくて丸みがある形（引っかかり欠けそうであったり違和感があるような形状ではなく丈夫であること）②360度どこから見ても成り立つ形（全面に彫刻や細工が施してある立体物であること）③紐通しの穴があること（もしくは紐を通すことのできる部分が用意されたデザインであること）が求められます。この約束事を守り、デザインの工夫がなされたもの、そして単に昔の根付の真似ではなく、作家性が発揮されたもの、それが「現代根付」といえるのではないかと思います。

「現代根付」とはやはり聞き慣れない呼び名に違いありません。1970年代、前述のような新しい根付を作っていこうという動きが、伝統的な根付制作の技術を守ってきた作家たちの中から生まれてきました。その大きなきっかけとなったのが、本展のコレクションを作ったキンゼイ夫妻でした。1977年に刊行されることになる *Contemporary Netsuke* という本を出版する計画で、その調査のために来日されたのです。現代に生きる作家の作品ばかりを本格的に取り上げた本書は、世界で初めてのもので、根付の世界に大きな影響を与えました。この本にのった作品のコピーさえ出回るようになったくらいです。「現代根付」とは、その名称、内容共々、本書に由来するものと言ってもいいでしょう。以来三十余年にわたり、キンゼイ夫妻は「現代根付」を支援し、その発展に力を尽くしてこられました。こういった意味でキンゼイコレクションは、世界有数の価値あるコレクションといえるのです。

以上のような状況ですから、本展は、キンゼイコレクションの日本初公開の展覧会であり、現代根付に関する世界で過去最大規模の展覧会であり、日本の美術館としては初の現代根付展であるという、初めて尽くしの企画となります。この機会に、日本からは高円宮憲仁親王殿下のコレクションから55点を賛助ご出品いただけることとなりました。殿下の根付に対する愛情や、いかに現代根付にとって心強い支援者でいらっしゃるかということなどは、本展のカタログにご寄稿いただいた文章によってよくわかりますし、キンゼイ氏との並々ならぬご縁も伝わってくることでしょう。殿下のコレクションもまた、ベルリン東洋美術館や日本では三嶋大社宝物館などで公開されており世界的に有名ですが、今回のご出品はまさに賛助していただいたというセレクションで、キンゼイコレクションにはない近年の象牙作品や、日本の最新の動向を伝える若手作家の作品、また同作家の同テーマの別の素材による作品など、いろいろな意味で見どころが凝縮された逸品揃いです。二大コレクションの競演にも是非ご期待下さい。



では、いくつかの作品を取り上げながら、現代根付の魅力をご紹介しますと思います。

立原寛玉
《幻兎》象牙 1973年

立原寛玉は、1944年生まれで、1970年代に根付の新しい流れを作ったグループの一人で、現代根付を代表する根付専門の作家です。象牙の作品を得意とし、量感あふれる躍動的な動物の根付に特に見応えがあります。本作品は、「勾玉兎」とか「シュールリアリスト・ラビット」との愛称で通じるほど有名な作品で、兎を勾玉の形に抽象的にまとめたもの。丸みのある形、ひねった題材の扱い、思わず掌中で撫でたくなるような、まさに根付らしい根付の名作です。

ニック・ラム
《十二支 大晦日の夜シリーズ》
黄楊 1994・1998年



ニック・ラムは1948年
生まれのイギリス人の

作家。根付を出版物を通じて知り、以来15年以上現在まで根付を手がけており、その高い木彫技術とウィットに富む作品で、英国において数々の受賞歴もあります。

この連作は、十二支の動物が、新年を迎えるにあたり、例えば、馬が蛇皮のブーツを脱いでいたり、猪が犬の首輪の上に寝そべっていたり、という具合に、旧年の干支の動物を乗り越えているというコンセプトによるもの。そのアイディアの面白さは根付の真骨頂といえ、得意の動物の彫刻は見事な出来映えです。黄楊という木は、櫛の材料としても良く知られるように、木目が細かく、緻密で粘りがあり、美しい光沢が出る上、丈夫であることから、根付にも最もよく用いられる木材です。



マイケル・パーチ
《メビウス連環》
マンモス牙 1997年頃
高円宮コレクション

マイケル・パーチは1926年生まれ。イギリス人の作家で、日本人以外の作家の草分け的存在です。子供の頃に親からもらって初めて根付を知ったといいます。この作品は、ワシントン条約で

象牙の取引が禁止されて以来、それに替わる最も近い素材としてしばしば用いられているマンモス牙の化石を用いて、見事な質感とボリューム感を表現し得たものです。メビウスの輪状の抽象的な形で、まるで面壁するかのような達磨を表しており、現代らしい作品といえるでしょう。同じテーマの別素材（コソウボクという木製）の作品もキンゼイコレクションから出品されますので、その比較も興味深いところです。

ワシントン条約とは、絶滅の危機に瀕した動植物を保護するために国際取引を制限するという趣旨のもので、1975年に発効され、象牙については1989年に輸出入が全面禁止となりました。そのため象牙の新しい材料は入らず、根付は海外への販路を失うこととなり、一時は象牙一辺倒であったこの世界に深刻な影響を与えました。しかしその前後の頃より、作家、収集家、ディーラーが共に象牙に替わる素材を積極的に求め、新たな技術を磨き、古くからの素材も見直してきた結果、素材のパラエテエーが現代根付の一つの大きな見どころとなっているのです。例えば、木材にしても、古くから用いられてきた黄楊や黒檀といったもののほか、マホガニー、スネークウッド、ブライアーといった家具やパイプなどの材料を使ったり、タグアナッツ（象牙椰子）という、木の実なのですが、乾燥するとまるで象牙のように堅くなって磨くと美しい艶もどるという珍しいものも使われます。昔から用いられてはいましたが彫刻が難しかった、琥珀や鹿角のような素材も、積極的に使われるようになり、驚くような新しい技巧の使い手も現れて、完成度の高い作品が見られます。会場ではそうした作品を原材料とともにご紹介していますので、お楽しみいただけたらと思います。また、黄楊や象牙の根付を実際に手に触れられるものもいくつか用意していますので、ぜひ手の中でそっと撫でたりしてみてください。

本展の会期中には、三人の根付作家をお招きし、制作の実演を間近に見ながら解説を聞くことのできるイベントを行います。何しろ手の中に収まるミクロの世界の技ですので、ビデオカメラなどを設置してできるだけご覧いただきやすくする予定です。また実際に黄楊や象牙などの材料に触れ、彫ったり削ったり磨いたり、という制作の工程を少しだけ体験できるような準備をしておりますので、この機会にぜひ皆様のお越しをお待ちしております。

学芸員 松尾知子

日本初公開 キンゼイコレクション 現代根付
手の中の森羅万象 世界の匠たち
賛助出品：高円宮コレクション

新世紀・市制施行80周年記念
第15回国際美学会議協賛

平成13(2001)年8月7日(火)-9月24日(月)
10:00-18:00 金曜日は10:00-20:00(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 ただし9月24日(月/祝)は開館
【入場料】 一般 800円(640円)
大・高生 560円(450円)
中・小学生 240円(200円)()内は前売・団体30名以上
上記入場料で、同時開催の「千葉市美術館所蔵浮世絵名品展」も併せてご覧いただけます。夏休み期間(8月中)は小・中学生は入場無料
9/17-9/24は、9/17より開催の次回展「日本の版画・1921-1930」と両方ご覧の方は、割引となります。(両展で一般1280円/大・高900円/中・小400円)
9月中の第2,4土曜日は市内小・中学生は入場無料
市内在住60歳以上の方は、一般料金の2割引
前売券は、JR東日本びゅうプラザ、千葉市美術館ミュージアムショップ(8月5日まで)ほかで発売
【主催】千葉市美術館 【後援】アメリカ大使館

イベント案内
根付制作 実演と解説 シリーズ
いずれも午後1:30より(開場1:00)11階講堂にて 入場無料/先着150名様

「根付の彫刻～象牙を彫る」 8月19日(日)
講師：駒田柳之氏(国際根付彫刻会会長)

指の先より小さな女性の顔が、ひと彫りごとに表情を変え、年齢を連れてゆく・・・！！ 彫歴50年、殊に「むすめ物」の根付では古今東西随一と認められる作家が、そんな顔彫りのパフォーマンスも交えながら、根付彫刻の歴史、道具、材料などについても解説します。

「根付の彫刻～黄楊を彫る」併設：ミニ体験コーナー 8月25日(土)
講師：東声方氏(日本象牙彫刻会会長)

黄楊という木は、根付にも最適の材料として、江戸時代以来象牙と共に最もよく用いられています。その黄楊をしばしば用いた躍動感あふれる人物や動物の根付制作で知られる作家が、大体の形を整える「突き」の段階から、削り、彫り、磨くなど、制作のさまざまな工程をダイジェスト版で披露します。
併設コーナーでは、実際に様々な刀やヤスリなどを手にとって、材料の堅さ、質感を感じ、根付彫刻の醍醐味の一端を追体験することができます。

「根付のさまざまな装飾テクニック」 9月9日(日)
講師：黒岩明氏(国際根付彫刻会役員/ジュエリーデザイナー)

根付には昔から工芸のあらゆる技法が用いられてきました。講師は、ジュエリー制作などの経験も生かした新感覚の根付を生み出している注目の作家。漆や金属、そして現代的な新しい材料なども用いて「現代根付」制作に生かされるさまざまな装飾テクニックをご紹介します。

ゲスト作家によるギャラリートーク
講師：駒田柳之氏(国際根付彫刻会会長)
8月11日(土) 13:30より 参加自由 8階展示室入口にお集まりください。

ギャラリートーク 担当学芸員による
8月21日(火)、8月28日(火)、9月8日(土) 午後1:30より
参加自由 8階展示室入口にお集まりください。

さや堂コンサート 「張勇 胡弓 悠久の音色」
出演：張勇(二胡)ほか(揚琴、琵琶)
9月15日(土) 午後2:00より(開場午後1:30) 1階さや堂ホールにて
入場無料 展覧会チケット(招待券不可)をご提示下さい。
お申し込みは、往復葉書にて美術館まで(お問い合わせ 電話043-221-2311)
※切は8月26日 定員150名(申込多数の場合は抽選)



鳥居清倍《市川團十郎の虎退治》

葛飾北斎《千絵の海 総州銚子》

千葉市美術館の 浮世絵コレクション

千葉市美術館所蔵 浮世絵名品展

千葉市美術館の浮世絵コレクションは、浮世絵版画が約950、肉筆浮世絵が約80、絵入版本が400点ですから、決して大きなコレクションとは言えません。しかし、初期から明治期まで、比較的バランスよく収集されており、名品と呼ばれるものも少なくないので、体系的かつ魅力的なコレクションではないかと自負しております。

収集の歴史は非常に新しく、まだ十数年しか経っていません。最初の収集作品は、1985年度から87年度の3カ年で購入した今中宏氏の所有する溪斎英泉の浮世絵版画200点です。千葉市美術館の設置が本格化するに伴って設立された「千葉市美術品等取得基金」による収集の始まる1990年に、浮世絵の収集も本格化します。その年の最初の購入品に、菱川師宣の肉筆画「角田川図」や、鳥居清広の版画「初代中村富十郎の娘道成寺」も含まれています。その年から、美術館がオープンする前年の1994年までの5年間で最も精力的に収集した時期で、喜多川歌麿の肉筆画「納涼美人図」など、過半の作品がこの時期の収集品です。

1995年度に美術館がオープンした後も、収集は継続されます。1995 - 97年の3カ年に分割して購入（一部寄贈）された、絵入版本のラヴィッツ・コレクション1,000点余（浮世絵師以外のものも含む）は、その中でも特筆すべきものでしょう。

近年の収集品としましては、初期浮世絵の名品、鳥居清倍画「市川團十郎の虎退治」、鳥居清長の代表作「美南見十二候 六月」、葛飾北斎画の稀品であり、房総を描いた浮世絵の代表作

鳥居清長《美南見十二候 六月 座敷の遊興》



ともいうべき「千絵の海 総州銚子」などを特に挙げておきたいと思います。

千葉市美術館の浮世絵コレクションは、写楽の版画が一枚もないなど、まだ充分とはいえませんが、浮世絵の諸分野をひとつおり網羅したものに育ちつつあるといえるでしょう。

学芸係長 浅野秀剛

千葉市美術館所蔵 浮世絵名品展

2001年8月7日(火) - 9月24日(日)

一般200円 大高生150円 中小生100円

同時開催の「キンゼイコレクション 現代根付」或いは「日本の版画 1921-1930」の入場券半券をお持ちの方は入場無料

これからの展覧会



奥山儀八郎《春の服地 メリヤス・靴下》1929年

日本の版画・1921-1930・都市と女と光と影と

9月18日(火) - 10月21日(日)

関東大震災という未曾有の出来事は古い東京を一掃し、現代生活の原形をつくった。鉄とコンクリートの構成物に変わりゆく街、因習から解き放たれ街を闊歩する女たちの姿に人々は好奇心に満ちた視線を投げかけた。

1920年代の版画界は、恩地孝四郎、平塚運一らの創作版画の作家たちが版画熱を煽り、かたや浮世絵の流れを汲む新版画も興隆した。また新興美術運動の村山知義らの存在も強烈な光芒を放っている。彼らが刻んだダイナミックで享乐的、同時に影をも宿した都市の姿は私たちには懐かしく、少しほろ苦く映るかも知れない。当時の社会を色濃く写す作品群 - ポスター、装幀、デザインなども含む約300点を展示。



一昨年開催の所蔵作品展「丹青放縦」展示室風景

千葉市美術館所蔵作品展

10月2日(火) - 11月4日(日)

千葉市美術館の収蔵作品（コレクション）にテーマを持たせて展示するもうひとつの企画展。房総ゆかりの美術、近世・近代の日本美術、現代美術の各分野から、名品珍品の数々を展示。



諸葛監《白梅小禽図》 千葉市美術館蔵

江戸の異国趣味 - 南蘋風大流行 -

10月30日(火) - 12月9日(日)

享保16(1731)年、長崎に一人の中国人画家、沈南蘋がやってきた。その精緻な描写と華麗な色彩による画風は、折からの博物学の流行もあり、上方、江戸へと広まり、当時の日本絵画に大きな影響を与えた。

伊藤若冲、円山応挙も南蘋の画風に学び、司馬江漢や俳人と謝蕪村も一時南蘋風の絵を描いている。また秋田蘭画もその影響を受けている。この展覧会では南蘋が江戸時代の絵画にもたらしたものを総点数137点で検証する。

展覧会の日程や名称は変更される場合があります。また、入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは下記または美術館までお問い合わせ下さい。

休館日 毎週月曜（祝日の場合はその翌日） 年末年始 展示替期間
 開館時間 午前10:00 - 午後18:00 毎週金曜日は20:00まで（入館受付は閉館の30分前まで）
 お問い合わせは NTT八ローダイヤル 043 - 227 - 8600
 URL <http://www.city.chiba.jp/art>
 e-mail museum@city.chiba.jp



西村陽平《穏やかな癒し》

1998-2000年

陶, トランジスタラジオ

写真提供: 佐倉市美術館

円い焼き物を抱きかかえるようにして耳を近づけると、中から微かな音が聞こえてくる。仕組みは単純で僅かな音量に調整されたラジオが内部に仕込まれているのだ。しかしその内容は内部の反響のため聞き取れず、遠くのせせらぎのように不思議な儂い音が反響しあうのが聞こえるだけだ。日本の造園術、水琴窟の音色のようである。

視覚障害者の美術教育に長年携わった作者西村陽平は聴覚に依拠する美術としてこの作品を制作した。水琴窟は手水鉢の排水孔に、小さな穴をあけて伏せた瓶が埋めてあり、水をしたたかせると水滴が微かに弦楽器のような緊張した音を奏で、しばし反響を残す。江戸時代中期に考えられたといわれているこの造園技術ももとはといえば、不用品の再利用がもたらした偶然の賜物であっただろう。火と空気、複雑な化学反応が幾重にも絡み合う焼き物とは基本的に結果の予想が困難な偶然の産物といってよく、その自然の要素の中にゆだねられれば、電波といえども限りなく自然に還元されていくかのようなようである。

学芸員 半田滋男

美術館のご利用あんない ◆ NTTハローダイヤル043-227-8600

1-2階 SAYA-DO HALL
さや堂ホール

昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物(ネオ・ルネサンス様式)を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1階 MUSEUM SHOP
ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

7階 AV CORNER
映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧頂けます。

10階 ART LIBRARY
図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。

[開室時間] 10:00~18:00

11階 RESTAURANT
レストラン

ランチタイム・喫茶にご利用下さい。

[営業時間] 11:00~21:00

- JR総武線千葉駅
- 東口より徒歩約15分
- 京成バス大学病院行または南矢作行(のりば⑦)「大和橋」下車徒歩約2分
- 千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩約5分
- ※長らく皆様にご利用いただいておりました「チーバス」は3月末に運行を終了しました。

- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

